英語の分詞の意味的特徴づけ

濱崎　孔一廊*・宇都　斗貴**

（2021 年 10 月 21 日　受理）

A Semantic Characterization of English Participles

HAMASAKI Ko-ichiro, UTO Kazuki

要約

外国語の学習においてさまざまな困難を学習者は感じる。その原因は母語と外国語の言語体系が異なるのに, どうしても母語の処理の仕方を外国語の場合に適用しようとしてしまうところにある。とりわけ，語彙的意味内容を持たない，いわゆる文法機能を果たす要素は，それが母語にない場合など学習者にとって極めて扱いにくいものである。たとえば，冠詞のような要素は日本語にないので，初学者はこの要素を無視してしまいがちだ。一方，母語にはない要素なのにあると思い込んで誤った使い方をしてしまう要素もある。たとえば時制要素などがその典型である。時制は,「時」を表すと単純に理解しがちで，日本語でも過去・現在・未来のような時の概念が念頭にあるため何となく理解したつもりになっている。これと似た要素として be 動詞がある。さらに，動詞が述語として用いられる文では，通常は be 動詞が現れないのに，現在分詞や過去分詞になると be 動詞が必要とされる。この場合，動詞はどちらなのか，両方なのか。そこで，本稿では実際の教育現場で生徒が混乱を起こす分詞を含む構造を取り上げ，その本質をあきらかにすることを目的とする。英語学という人文社会科学の立場から教育現場で抱える問題に一つの糸口を与えることを目指し，分詞の意味構造や be 動詞の意味構造を理解しておくことが必要であるということを論じていく。

キーワード：分詞，形容詞，意味構造，be 動詞，助動詞

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系　教授（※特任教員は教育学部所属）
** 鹿児島市立和田中学校　教諭

1. はじめに

中学生が英語を学習する際に，動詞から派生した現在分詞や過去分詞の用法に混乱を生じることがある。どのような混乱が生じているか聞いてみると，まず，次の例にみられる動詞と形容詞との違いで，例文(1a)のように動詞が用いられるときにはbe動詞は現れないのに対し，(1b)のように形容詞が用いられる場合にはbe動詞が出現するという理解をしているのであるが，動詞が(2)の例のように，現在分詞や過去分詞になったときにbe動詞が必要になるという現象に関する混乱である。

(1) (a)　I like dogs.

　　(b)　We are happy.

(大西，マクベイ (2011: 56))

(2) (a)　Lucy is putting on her make-up.

　　(b)　John was attacked by the dog.

(大西，マクベイ (2011: 447, 481))

すなわち，(1a)のように述語が動詞の場合にはbe動詞は伴わないはずなのに，(2)に示されるように，動詞が分詞になると同じ動詞でありながら，(1b)の形容詞が用いられる場合と同じようにbe動詞が必要になることを不思議に感じているのである。

実際に中学生に英語を教えるときに，このような混乱を覚えることに対してどのような指導上の手立てを講じたらよいのかを考える必要があるが，そのためには，まず，動詞から派生された現在分詞や過去分詞がなぜ形容詞と同じような振る舞いを示すのかを明らかにしておく必要があろう。そこで，本稿では，もともと動詞であったときにはbe動詞を伴う必要がなかったのに，分詞になると，なぜ形容詞と同じようにbe動詞が必要になるのかという学校教育の現場における疑問に対して，認知文法理論の観点からその理由を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究における動詞範疇の特徴づけ

動詞という範疇の特徴づけとして綿貫ほか（2000: 376）では，「動詞は人や事物の動作・状態・性質などについて述べる語で，現在・過去・過去分詞という語形変化がある。述語動詞の用法のほか，不定詞・分詞などの用法もある。」と記されている。この記述の問題点として次のようなことが挙げられる。第１に，前半部分で，動詞の意味的特性を述べていると思われるが，「動作」は良いとしても「状態・性質」に関しては形容詞との違いが分かりにくく思われる。第２に，語形変化の特徴が述べられているが，ただ単に語形変化という形態現象を記述しているにすぎない。しかも，語形変化というなら現在分詞のような-ing形を含めていないという点で記述が不十分になるのではないか。さらに，ここで問題にしているbe動詞に関していうと，過去分詞が受動態で用いられるときに何故be動詞が必要になるのかについての説明がない。第３に，用法として不定詞と分詞が挙げられている点である。分詞のうちの過去分詞は，最初の語形変化でも触れられているが，

語形変化と用法の両方に過去分詞だけが入れられているのは何故か。また，範疇としての問題として，不定詞には名詞的用法，形容詞的用法，副詞的用法がある。動詞という範疇でありながら，何故異なる範疇の用法があるのかが不明である。このように，記述としても不正確である上，説明的妥当性がない。そもそも，不定詞・分詞というのは用法なのか。

次は，Chomsky (1995)の枠組みに基づく生成文法理論がどのように分詞を分析しているか見ていく。[1] (3a)の trying という現在分詞も，(3b)の left という過去分詞も，共に V という範疇に属するものと分析されている。Grimshaw (1990)等で提起された述語（predicate）と項（argument）の関係を考えると，通常の現在形や過去形の動詞と分詞を同じ範疇の述語と分析することは妥当だと思われるが，では，時制接辞を伴う動詞の V と分詞の V とはどのような点で異なるのか，とりわけ分詞の方に be 動詞が必要になるのは何故かということの説明がなされていない。

(3) (a)　$[_{TP}$ We $[_{T}$ are$]$ $[_{VP}$ $[_{V}$ trying$]$ $[_{TP}$ to help you$]]]$

(b)　$[_{TP}$ They $[_{T'}$ $[_{T}$ have$]$ $[_{V}$ left$]]]$

(c)　$[_{TP}$ They $[[_{T}$ *AI*$]$ $[_{VP}$ $[_{V}$ believe$]$ $[_{TP}$ him $[_{T'}$ $[_{T}$ to$]$ $[_{VP}$ $[_{V}$ be$]$ $[_{A}$ innocent$]]]]]]]$

(Radford (2009: 45, 99, 128))

現在の日本の中学校英語教科書でも，動詞は「原形／現在形・過去形・過去分詞形」という風に形態変化を起こすと見ている。しかし，このような捉え方は定形動詞と非定形動詞，さらに時制とアスペクトという概念を理解していないことから生じているものと考えられる。

そこで，次節では，上記の問題を解くために，認知文法（Cognitive Grammar）理論の考え方に基づき，定形動詞と分詞の意味構造の違いを検討していく。

3. 定形節おける分詞と be 動詞の意味構造

第 2 節で見てきたように，分詞は動詞の範疇に含まれるものの，何故通常の定形動詞と異なり be 動詞を必要とするのかということに対する説明が従来の記述文法や学校文法，生成文法理論ではなされていないことが明らかである。それは，分詞や be 動詞のもつ意味や機能を明らかにすることにより説明できるということを見ていく。まず，一般的な動詞の表すプロセスとはどういう風に分析されるのかを見ていきたい。

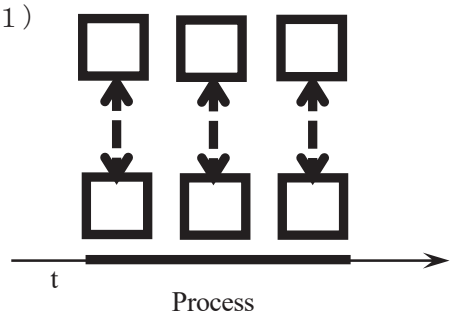
通常の動詞の表すプロセスの意味構造は，認知文法理論において図１のように表示される。図の中の四角い部分は，存在物（entity）[2]を表し，２つの存在物間の矢印は，両者の間に成り立つ関係を表す。その関係が矢印で示された時間軸に沿って展開されることを同じ関係性を示す図が３つ並べてあることで示される。実際には，２つの存在物間に成り立つ関係は３つということではなく，連続して継続していくのが典型的である。太線にしてある部分は顕現部（profile）といい，卓立し

[1] 実際の表示は樹形図で示されているが，紙幅の制限により標示付き括弧区分（labeled bracketing）に改め，ここでの議論に関わりのない部分を省いたりして少し変えてある。また，多少異なる分析も存在するが本質的な部分は変わらないので，ここでは Radford (2009)の分析に従う。

[2] 存在物（entity）についての詳細は，Langacker (2008: 98)を参照されたい。

ている部分，すなわち，強く認識されている部分を示す。時間軸の矢印の中で太線になっている部分がこのプロセスの継続時間を示している。このように，動詞で表されたプロセスは一定の時間の継続を伴う。そのプロセスが時制によって発話時と同時かそれ以前に位置づけられるのである。

（図１）



（Langacker (2008: 99)）

つまり，分詞にならない通常の動詞（定形動詞）は，表されるプロセスに一定の時間の広がりを伴うということである。

では，このようなプロセスが過去分詞になる (4)の例を見ていこう。

(4) (a)　The students **had collected** a lot of money for the trip.

(b)　This building **was designed** by a famous architect.

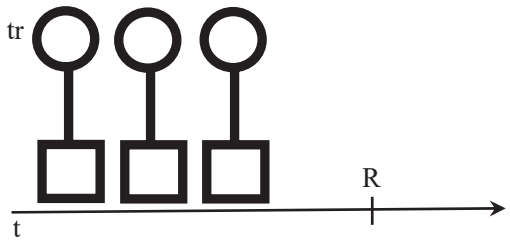
(c)　The pond is **frozen**.

(d)　The **demolished** cathedral took a century to rebuild.

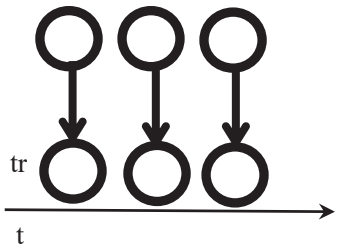
（Langacker (2008: 121)）

例文(4a)は完了形で，動詞が過去分詞になっている。これは下の図２のように表される。図の丸い部分は主語の the students を表す。これを Langacker (2008: 98)は thing[3]と呼んでいる。四角い部分が a lot of money を表し，動詞 collect の意味を表すものとして両者をつなぐ矢印で示されている。丸い thing についている tr は trajector といい，プロセスへの参与者（participant）の中でも一番目立った存在を示し，これが主語として現れると考えて良い。したがって， (4b)の受動文になると，図３に示されるように，能動文での目的語になる this building の方が trajector となっていることに注意してもらいたい。話を図２に戻すと，時間軸上には R という基準時（time of reference）が示されている。現在完了形の場合には，R は発話時となるが，過去完了形の場合は，発話時よりも前の特定の過去時となる。

（図２）　*Perfect*



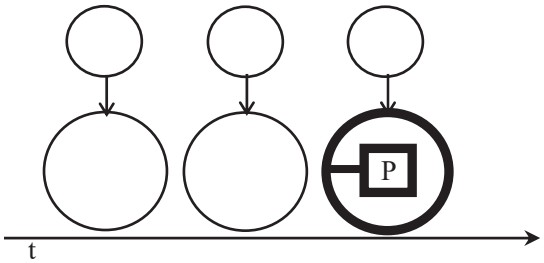
（図３）　*Passive*



[3] Thing という概念の詳細な議論については，Langacker (2008: 98, §4.2.2)を参照のこと。

（図４）　*Stative*（*Intransitive*）

（図５）　*Stative*（*Transitive*）



（Langacker (2008: 121)）

ここで，大事なことは，先ほどの通常のプロセスとは異なり，時間軸上に顕現部が現れていないことである。すなわち，完了形ではプロセスの全体ではなく，プロセスの完了した側面（アスペクト）だけが問題となり，その帰結として，顕現化され明白に認識され表現された事象には時間の広がりが出てこないという点である。通常の動詞の場合は，時間軸上に位置づける時制要素が動詞に接辞として現れるのに対して，完了形の方にはプロセスを表す述語動詞には時制は現れず，助動詞化[4]した have の方に現れるのはそのためである。完了分詞の接辞は，完了（perfect）というアスペクトを表しており，時制とは直接関係がない。

図４では，(4c)の凍るというプロセス[5]の完了した状態だけが顕現部となっている。この場合も，焦点化されるのは，凍るプロセスの完了した状態だけであり，時間的な広がりをもたない。したがって，ある特定の状態を示す形容詞の表す意味構造と似たような状況になり，(4c)のような叙述用法（predicative use）で用いられると同時に，(4d)のような限定用法（attributive use）で用いることも可能なのである。形容詞の場合は，状態の変化を必ずしも伴う必要がないのに対し，分詞の場合は元々の動詞の表すプロセスを内包しており，したがって，ダイナミックなプロセスが内在しているという点にある。

今度は，現在分詞の意味構造を検討してみよう。例文(5)では，知覚動詞の補部（complement）にあたる小節（small clause）[6]内に現在分詞が用いられている。太字の小文字 **p** はプロセスを表し，C_1 は主語の表す人物である。[7] このような構文では，主語の人物は爆発という出来事全体ではなく，その途中の継続状態を表している。いわゆる進行相（progressive aspect）である。

(5)　We {saw / heard / felt} the bombs **exploding**.

（Langacker (2009: 300)）

---

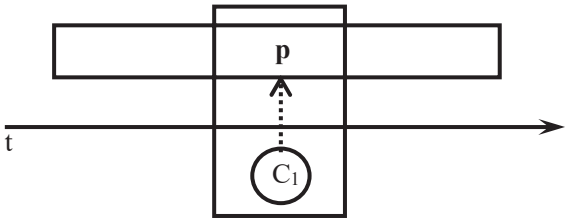
[4] 助動詞化していることは，have が疑問文において主語との倒置を起こし，否定文では have の方に否定辞が付くことからも分かる。しかし，これらの現象はここでの議論に直接関わってこないので，これ以上は立ち入らない。

[5] 丸い thing の内部にある entity の中の P は特性（property）を表す。凍るという途中のプロセスは点線で示してあるのは，途中段階では凍る状況が不完全だからである。

[6] 小節（small clause）とは，時制要素の現れていない主語と述部だけから成る節のことである。

[7] C_1 は，正確には conceptualizer を表す。認知文法では，人の認知能力が言語にもたらす影響を考慮して分析しているので，出来事を概念化（conceptualize）する主体という意味である。数字の指標（index）が打ってあるのは，話し手 C_0 と区別するためである。

（図６）　*-ing*



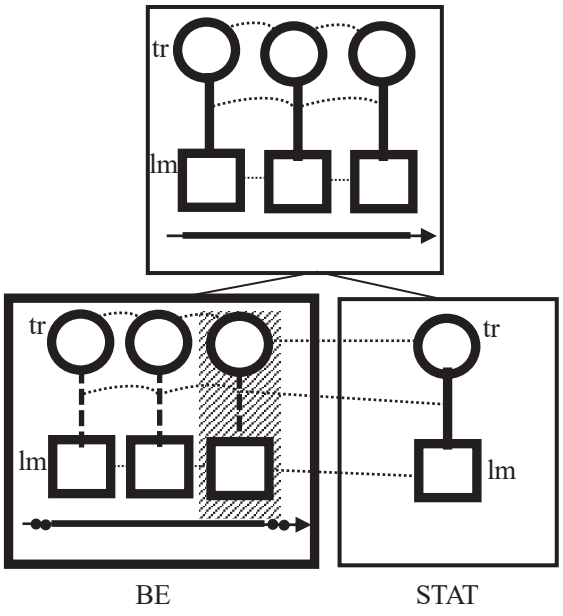
（Langacker (2009: 300)）

このように-ing 形になると，プロセス全体は一定の時間を要するが，進行相というアスペクトを用いると，時間の広がりの感じられない途中の継続状態だけが表されることになる。したがって，時間の広がりを持たせるには，(6)に示すように be 動詞が必要となり，be 動詞を伴うことで，このプロセスに時間の幅が生まれる。それゆえ，be 動詞に時制要素が現れるのである。

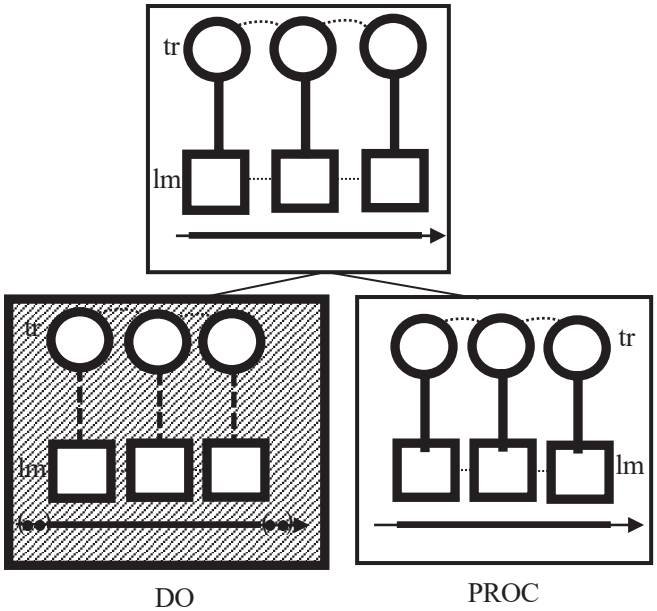
(6)　The bombs *were* **exploding**.

疑問文で主語の前に前置され，否定文では否定辞を伴う要素が，be になるプロセスと do になるプロセスの意味構造は，それぞれ図７と図８のように示される。

（図７）　BE-STAT



（図８）　DO-PROC



（Langacker (1990: 137)）

図７では，右下に示される状態（State）は時間の広がりをもたない。したがって，時間軸も表されていない。左下にある構造は be 動詞の表す意味構造である。こちらは，右側の状態を表す意味構造と重なり合って，上の図に示すように，時間の広がりをもっていなかった状態にある一定の時間的広がりが生じることを示している。すなわち，下のレベルの意味構造の中の各要素と点線でつながった斜線部分の状態に時間的な広がりを持たせる機能を図示したものである。それゆえ，これらを合わせると，統合された上の意味構造のように状態が一定時間継続する構造ができあがる。一方，図８では，右下が通常の動詞が表すプロセスである。動詞が表すプロセスは，その本質として

一定の時間を要する。一方，左下の意味構造をもつ do は，さまざまな動詞のプロセスを包括した抽象的・一般的なプロセスとなり，具体性をもたない。したがって，通常は現れてこないが，疑問文や否定文のときに時制要素が独立して現れる場合[8]に出現する。また，疑問文に対する応答の場合等に do だけが現れ具体的なプロセスの代用表現となるのである。

4. 小節（small clause）から見た be 動詞の機能

前節では定形節における be 動詞の意味構造を見ることで，この動詞のもつ意味・機能を明らかにしてきた。そこで，本節では非定形節の一種である小節において be 動詞が現れないことによってもたらされる効果から，be 動詞の意味をより鮮明にしていきたい。be 動詞があるかないかでどのように意味が異なるかについては，Postal (1974)の繰り上げ（raising）構造を批判して Langacker (1991)が，(7)のそれぞれの文における意味の違いに言及している。

(7) (a)　Susan found **that the bed was uncomfortable**.

(b)　Susan found the bed **to be uncomfortable**.

(c)　Susan found the bed **uncomfortable**.

(Langacker (1991: 450))

これらの文は，一見同じような意味を表しているように見えるかもしれないが，実際には用いられる場面が違うということが Borkin (1973)によって指摘されている。すなわち，(7a)の例は，顧客への調査を行った結果を記したファイルを読んでベッドの寝心地がよくないということが分かったという場面にふさわしく，それに対して，(7b)では Suzan 自身が顧客への調査を行った場合により適切な表現となる。これはいずれも埋め込み節内に be 動詞がある表現である。ベッドの寝心地の悪さという状況が一定の時間続いたことを暗示しているのである。それに対して，(7c)の方は，Susan 自らがベッドに寝てみて，寝心地の悪さを直接体験したという含意が出てくるとされる。これは，be 動詞を含む表現は，状況の時間的広がりを感じさせ，その結果，ベッドの寝心地が悪いという状況をある程度の距離を置いて客観的に捉えている印象を与える[9]のに対して，(7c)のように be がない場合には，ベッドの寝心地の悪さという状況は時間的広がりをもたず，その状況が発話の場の間近での出来事とか，あるいは，発話者自身がその出来事に直接関与している含みを持たせるからである。以上見てきたように，be 動詞が現れないことで似たような表現との違いからこの要素の意味が明確になる。

今度は，小節に述語として形容詞と分詞が現れる構造を見てみよう。

(8) (a)　She *is* **happy**.

(b)　We found her **happy**.

---

[8] どのような場合に do が現れるのか，またそれは何故なのかということに関しては，ここでのテーマとずれてくるので，取り扱わない。

[9] 実際には，補文標識(complementizer)の that や不定詞標識 to もこの距離感や客観性の含意に関わっている。

(9) (a) The dog *was* **running**.

(b) We saw the dog **running**.

(8a)と(9a)に示される節では，述語として形容詞と分詞が使われている。それぞれに対応した小節を含む(8b)と(9b)を観察すると，小節の述語として残っているのは形容詞 happy と現在分詞の running だけで，いずれも be 動詞は現れていない。be 動詞が述語動詞であるならば，節の内部に留まらなければならないはずである。しかし，機能的要素が脱落してしまう小節構造において be 動詞が現れないということは，be 動詞が語彙的要素というより機能的要素であるということを示唆しているものと考えられる。では，次節で，be 動詞が一種の助動詞として機能していることを助動詞の do との比較によって検討していく。

5. 助動詞としての do と be との意味・機能における違い

第 3 節では，認知文法理論の枠組みから，定形節で分詞が述語として用いられる場合に生じる be 動詞と分詞の意味構造を見て，第 4 節で，小節構造から be 動詞の特性を考察してきた。さて，ここで改めて最初の問題提起で示した例を考えてみよう。

(1) (a) I like dogs.

(b) We are happy.

(2) (a) Lucy is putting on her make-up.

(b) John was attacked by the dog.

これまでの考察から，(1a)のような一般動詞が用いられる定形節では be 動詞が出てこないのに，(2)に示すように動詞が分詞になると be 動詞が出てくるのは，(1b)のような形容詞が用いられる例と同じように，分詞も形容詞と同じく述語として用いられており，なおかつ，どちらも時間の幅をもたないプロセスを表していることが明らかである。

さらに，一般動詞のように時間の広がりを示すプロセスと，形容詞や分詞のように時間の広がりを持たないプロセスを表す文の疑問文形成時に生じるいわゆる主語・助動詞倒置を観察してみよう。

(10) (a) She likes dogs.

(b) *Does* she like dogs?

(11) (a) They *are* **happy**.

(b) *Are* they **happy**?

(12) (a) They are **coming**.

(b) *Are* they **coming**?

(10)の例では述語に動詞が用いられ，(11)や(12)の例では述語に形容詞と分詞が用いられていると考えると，疑問文形成時に主語の前に移動されるのは，時制要素ということが分かる。また，文頭に移動される要素は語彙的意味をもつものではなく，機能的要素であるとするならば，be 動詞は文

法機能をもつ助動詞[10]であり，形容詞や分詞は語彙的意味を持つ要素だという点からすると，疑問文形成を一般動詞と be 動詞で分けるのは筋違いの考え方ということになろう。現在完了形の疑問文で文頭に have 動詞が置かれるのと同様に，be 動詞も似た機能を果たしていると考えられる。

6. むすび

最後に助動詞 do と be の共通点と相違点をまとめることで，be 動詞の機能を特定しておきたい。助動詞 do と be の共通性には以下のことが挙げられる。

(13) 叙述内容を表す節(clause)の一部ではなく，文法性の高い機能（叙述内容を代表して表し，第二構成素位置に置かれる時制要素を支える機能をもつ。

(14) したがって，時制節で表された叙述内容の非事実性（否定文であること）を示すときには，do や be が否定辞と結びつく。

(15) 一方，叙述内容の事実性を相手に尋ねる疑問文の場合には，時制要素と一緒になって第一構成素位置に置かれることにより，その語順の違いによって疑問文であることを示す機能をもつ。

一方で，両者には次のような違いも見られる。

【助動詞 do】

(16) 一般動詞を総合し抽象化したもので，一般動詞の代用形(proform)として機能をもつ。

(17) 時制要素がその持つ機能を果たすために一般動詞から独立して現れるとき（疑問文や否定文の場合）に，独立して現れることのできない接辞を支える機能をもつ。

(18) したがって，時制要素が独立するとき以外は表面に現れない。

(19) Do が代表する動詞のプロセスは動的で，その結果，時間の広がりを本質的に内在する。

【助動詞 be】

(20) 時間の経過を伴わない述語（形容詞，叙述名詞，前置詞，分詞）に時間の広がりを持たせる機能をもつ。

(21) 時間の経過を伴わないプロセスに時制が現れるとき，be が現れることで時制を示すことを可能にする。

(22) したがって，定形節(finite clause）のように，時制をもつ節で，述語が時間の経過を伴わない場合は，be が現れる。

(23) 一方，非定形節(non-finite clause)のように時制を持たない節で，述語が時間の経過を伴わない場合には，be は現れない

以上見てきたように，動詞はその本性として時間の広がりを示すプロセスを示すものでありなが

---

[10] ただし，存在構文における be 動詞が exist 等の語彙的動詞であることを考えると，be 動詞に語彙的意味合いがないと考えるのは問題かもしれない。しかし，英語の機能的要素の多く（不定詞標識 to や補文標識 for 等）が語彙的要素から発達したことを考えると，語彙的意味を残していることも不自然ではない。

ら，分詞になると時間の広がりを持たない述語となり，その点で形容詞と似たような性質をもち，時制節では時制が時間の広がりを伴うために，時間の広がりを持たない述語には be 動詞が必要となるのである。

参考文献

大西泰斗，ポール・マクベイ（2011）『一億人の英文法』東京: 東進ブックス.

綿貫陽，宮川幸久，須貝猛敏，高松尚久（2000）『ロイヤル英文法』東京: 旺文社.

Borkin, Ann (1973) "*To be* and not *to be*," *CLS* 9: 44-56.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Volume 2. Stanford, California: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Postal, Paul M. (1974) *On Raising*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Radford, Andrew (2009) *Analysing English Sentences: A Minimalist Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.